

緒 言

内海文化研究施設が創設されたのは昭和47年（1972）なので、今年は45周年にあたる。

広島大学大学院文学研究科の前身である広島大学文学部では、早くから瀬戸内海を中心に展開した内海文化に深い関心を持ち、研究室ごとに、それぞれの分野において研究を進めてきた。

現在の「内海文化研究施設」は、そのようにして成立した「瀬戸内海言語資料室」「帝釈峡遺跡群発掘調査室」「角筆資料研究室」などの諸施設を包摂する形で誕生したのであり、今もなお歴史・地理・言語・文学・思想史など多方面から、独自の文化圏の特色について明らかにしつつ、内海文化の総合的な研究をめざしている。

さて、瀬戸内海全体を一つのまとまりとして意識し始めたのは日本人ではなく、実は幕末から明治時代にかけて来日した欧米の人々であったという理解がある。すなわち、彼らがThe Inland Seaと呼んだことを端緒として「瀬戸内海」という表現がその後社会に広まり、今日に至ったという考え方である。その当否はともかく、近代以降日本では瀬戸内海の多島美が持つ勝れた景観が高く評価され、国立公園法が制定された3年後の昭和9年（1934）に、雲仙・霧島とともに日本初の国立公園として「瀬戸内海国立公園」が誕生した。

また、約20年前の平成8年（1996）年には「厳島神社」がユネスコの世界遺産（世界文化遺産）リストに登録されたほか、つい最近では「村上海賊」が日本遺産に認定され、さまざまな角度から瀬戸内海に光が当てられつつある。

歴史を振り返ると、源平の争乱に代表されるように瀬戸内海は闘いの場であったこともあるが、一方で生活する場、稼ぎがおこなわれる場でもあった。古代、瀬戸内海を舞台に製塩・漁業を生業とする海民集団が登場したが、彼らの中には中央や地方の諸権力によって編成された者もあれば、しだいに自立化し、専門の海運業者となった者もあった。特に中世では、海の領主として海上に「ナワバリ」を持ち、その海域を通行する船舶から通行料を徴収し、航海の安全を保障する「海賊」が登場する。中央政権の支配権が瀬戸内海全域に及ばない状況下、海に関わる者たちの間で海域社会の秩序が維持されていたのである。

瀬戸内海と言えば、製塩である。15世紀半ばの瀬戸内海における物流を示す「兵庫北関入船納帳」の記載内容から、瀬戸内海における物流の代表が塩であったことはよく知られているが、近世には塩田の開発がさらに進み、17世紀半ば播磨赤穂に始まる入浜式製塩技術は、瀬戸内十州全域に広がり、この十州塩田で全国生産の90%を占めたという。日常的な食生活に不可欠な塩は、実は内海文化研究の重要なテーマの一つである。

これまで本施設では、愛媛県大三島・岡山県真鍋島・大分県姫島・広島県厳島（宮島）などで現地調査をおこない、遺跡の発掘や、海を舞台に活躍する人々の歴史・文化の調査、島民の現在のくらしや言語文化について明らかにしてきた。こうした内海島嶼部についての調査をこれからも継続するとともに、島と島、島と沿岸の政治的・経済的・文化的な関係や交流についても、多角的に分析していく必要がある。

5年後には創設50周年を迎える。今こそ、もう一度原点に立ち返って、本施設がはたすべき学術面も含めた社会的責任を自覚し、新たな一歩を印していかねばならないと考える。

平成29年3月

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設
施設長 本 多 博 之

目 次

緒 言

岩国市中央図書館所蔵和装図書目録稿(6)

—文学の部（後半）、補遺— ……………妹 尾 好 信…… 1

〈資料翻刻〉永代美知代「デツカンシヨ」(2)

……………有元 伸子・板倉 大貴・萬田 慶太・熊尾 紗耶…… (63)

山口県文書館蔵「近藤芳樹日記」翻刻（十二）……………久保田 啓 一…… (49)

『芸備日日新聞』巖島関連記事(8)……………勝部 真人・海 阿 虎…… (25)

豊臣政権の次夫・次馬・次飛脚・次船制について……………本 多 博 之…… (1)

() は縦組で裏表紙から

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設研究紀要投稿・執筆要項

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設細則

広島大学大学院文学研究科附属内海文化研究施設運営委員および研究員（平成28年度）